

英語冠詞の語法

柏野健次

1 はじめに

このところ、英語の冠詞についての議論が活発である。2002年に石田秀雄著『英語冠詞講義』(大修館)と織田稔著『英語冠詞の世界』(研究社)が出版され、2003年には樋口昌幸著『現代英語冠詞事典』(大修館)と石井隆之著『冠詞マスター教本』(ベレ出版)が刊行された。また、本年(2004年)には久野 暲・高見健一共著『謎解き英文法 冠詞と名詞』(くろしお出版)も名を連ねた。さらに冠詞に限定するのでなければ、1998年には武田修一著『英語意味論の諸相』(リーベル出版)が、1985年という早い時期に池内正幸著『名詞句の限定表現』(大修館)が出されている。

海外では、冠詞論の古典というべき、J. A. Hawkins の *Definiteness and Indefiniteness* (1978, Croom Helm) が未だ健在であるし、また比較的最近、上梓された Christopher Lyons の *Definiteness* (1999, CUP) も Hawkins (1978) 以降の議論の発展を知る上で貴重である。

本稿では、まず、冠詞の基本的な意味を規定することから稿を起し、そのあと「特定性という概念」「関係代名詞の先行詞の冠詞選択」「a/an + 名詞と the + 名詞と無冠詞 + 名詞」の3つのトピックを取り上げ、意味に基盤を置いた語法の観点からの考察を試みる。

2 冠詞の表す基本的な意味

定冠詞の the は基本的に次の2つの意味を表す [cf. Eastwood (1994:202)]。(1)は語用論的な意味であり、(2)は意味論的な意味である。

(1) the に続く名詞は談話のなかですでに言及されている

(以後、[+ mentioned] と呼ぶ)

(2) the に続く名詞は、その文脈のなかで1つしかない、あるいは1人しかいない

([+ unique] と呼ぶ)

一方、不定冠詞の a/an は基本的に次の2つの意味を表す [cf. Eastwood (1994:202)]。定冠詞の場合と同様、(3)は語用論的な意味であり、(4)は意味論的な意味である。

(3) a/an に続く名詞は談話のなかに初めて現れて、それまでは言及されていない

([- mentioned] と呼ぶ)

(4) a/an に続く名詞は1つだけ、あるいは1人だけとは限らない

([- unique] と呼ぶ)

(4) について補足すれば、a/an は複数存在する、あるいは複数存在しうるものの1つあるいは1人を指し、例えば I'm going to wash *a* car. と言えば車が2台以上あることになる [cf. マケーレブ (1998 : 35-38)]。ただし、C. Lyons (1999 : 12) は、a/an + 名詞のもつ [- unique] という特性は含意であって、キャンセルできると言っている。¹

(5) Janet ran well and won *a* prize – the only prize in fact.

3 特定性という概念

a/an は不定冠詞と呼ばれていることから分かるように、「a/an + 名詞」は不特定の人や物を指すことが多い。ただし、文脈によっては特定の指示対象の存在を前提とし、特定性 (specificity) を表すこともある。

例えば、指示的に透明な文脈 (non-opaque context) に生じた (6) の *a* book は話し手にとって特定のであるのに対して指示的に不透明な文脈 (opaque context) に生じた (7) の *a* book は話し手にとって特定性に関してあいまいになる [cf. Givón (1973 : 96)]。²

(6) John is reading *a* book.

(7) John wants to read *a* book.

一方、the は定冠詞と呼ばれていることから分かるように、「the + 名詞」を用いるときは、話し手は通例、特定の指示対象の存在を前提としている。この場合、特定のとは、話し手にとってだけでなく聞き手にとっても特定のであることを意味する [cf. Leech (1981 : 157)]。なお、「the + 名詞」の場合の特定性は、特に指示性 (referentiality) と呼ばれる。

例えば、Can I have *the* car? では話し手は自分の言っている車がどれか聞き手が認定できるとの前提のもとに発言している [cf. Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999 : 282)]。

しかし、「the + 名詞」は特定性だけを表すわけではない。Donnellan (1971) が早くから指摘しているように、(修飾語句を伴った) 「the + 名詞」は不定の意味を表すことがある。³

Huddleston & Pullum (2002:403) は、この「the + 名詞」を取り上げ、(8) のような指示的に不透明な文脈に生じた *the* boy は特定の boy を指す場合も不定の boy を指す場合もあると述べている。そして、後者の意味では (9) のように、whoever it is を付け加えることができるとしている。

(8) *The* boy who wrote this email must be expelled.

(9) *The* boy who wrote this email must be expelled, *whoever it is*.

ここでは、話し手は *the* boy (1人) の存在を信じてはいるが、誰であるか突き止める (identify) までには至っていないという点が重要である。

以下に実例を挙げる。次は4人の高校生がいて、そのうちの1人 (Dave) が24歳の男性を殴り殺してしまったという事件が話題となっている。引用部は彼らが弁護士 (Strecker) と話をし

ている場面である。弁護士は Dave が犯人であることをまだ知らない段階での発言であるから、この「the + 名詞」は不定の意味を表していることになる。

- (10) “We oughta talk to the lawyer,” said Tony. They asked Strecker to come in. “Here’s where it stands,” he told them immediately. “We can make it involuntary manslaughter. *The* man who threw the last punch can plead guilty to that. He’ll get probation.” “But he’ll have felony record,” said Dave despondently.

(H. Robbins, *Never Enough*)

この「the + 名詞」の用法は Donnellan (1971) が30年以上も前に指摘していることであるが、まだ一般には知られていないように思われる。

4 関係代名詞の先行詞の冠詞選択

この節では、「a/an [the] + 名詞 + 関係代名詞節」の構造における冠詞の選択の問題について考察する。

Eastwood (1994 : 358) によると、関係代名詞節の機能は2つあり、1つは先行詞を分類 (classify) することであり、今1つは先行詞を認定 (identify) することである。前者では先行詞には a/an が付けられ、後者では the が付けられるのが普通である。

- (11) We’re looking for *a* pub that serves food.

- (12) I can’t find *the* book that I was reading.

2節で述べた [± mentioned] [± unique] という意味特徴を用いると、(11) の a pub は [- unique] という意味を表し、(12) の the book は [+unique] という意味を表している。[± mentioned] については、上例では文脈がない以上、確定的なことは言えないが、恐らく、a pub は [- mentioned] で、the book は [+mentioned] であろう。

以下では、文脈の整った実例を挙げ、これらの意味特徴に基づいて1つずつ吟味していく。その際、意味特徴を(13)のように4通りに分類する。

- (13) a. [+ mentioned] と [+ unique] の組み合わせ
b. [- mentioned] と [- unique] の組み合わせ
c. [- mentioned] と [+ unique] の組み合わせ
d. [+ mentioned] と [- unique] の組み合わせ

(13a) と (13b) は、2節で述べたことから明らかなように、「the+ 名詞」と「a/an + 名詞」で具現される。これらの例はすでに (11) と (12) で挙げたが、以下には補足の意味で、文脈の明らかな実例を引いておく。

- (14) “Do you have that shoe with you?” “I do, yes, sir.” “Produce it, please.... This is *the*

shoe which you found in the defendant's apartment?" "Yes, sir."

(E.S. Gardner, *The Case of the Long-Legged Model*)

- (15) "What kind of secretary do you want?" "You know," Sam said. "A girl who could do things without you having to tell her twice." (H. Robbins, *The Inheritors*)

(13c) は有標 (marked) の組み合わせであるが、これが「a/an + 名詞」で具現化された例が結構、よく見られる。ある「冠詞 + 名詞」が [+ unique] という特徴を表しているも、それが談話のなかで初めて言及される場合 ([- mentioned]) には、a/an で具現されるというわけである。この場合には、a/an のもつ意味論的意味よりも語用論的意味が優先されていることになる。

- (16) "I have a girl that I married in Harlem before I went into the army."

(H. Robbins, *The Predators*)

- (17) "Garvin, I am going to show you a fingerprint which was recovered from the knob of the back door. I may further state that someone had evidently wiped the knob of that back door clean of fingerprints. There was only one fingerprint on it."

(E.S. Gardner, *The Case of the Long-Legged Model*)

特に (17) では、「指紋は1つしかなかった」という最後の記述に注意したい。

同じく (13c) の組み合わせは、ときに、「the + 名詞」で具現化されることもある。ここから、関係代名詞節を伴えば、「the + 名詞」は初出でも用いられることになる。これは「the + 名詞」のもつ [+ unique] という意味論的意味が [+ mentioned] という語用論的意味より優先された結果、生じた現象と考えられる。

- (18) Denise was in bed when she heard the car entering the driveway. She put down the book she had been reading and listened. (H. Robbins, *The Inheritors*)
- (19) Did you read in the paper today, about the man who was walking his dog? He was attacked, and his wallet and his watch were taken. (*Seven* [映画台本])

Hawkins (1978: 131) はこの種の関係代名詞節を「指示対象を確立するための関係詞節」(referent-establishing relative clauses) と呼んでいる。⁴ ただし、彼は、何のために初出で「the + 名詞」を使う必要があるのかは述べていない。これは Leech (1983:91-92) の言うように「the + 名詞」が unique であることを際立たせたいためであろう。⁵

では、初出で「the + 名詞 + 関係代名詞節」が使えるための条件とはどのようなものだろうか。本来、「the + 名詞」は、話し手と聞き手によって共有される知識に基づいて認定できるただ1つの指示対象が存在する、と話し手が前提としていることを表す [cf. Leech (1981:157)]。「the + 名詞」に「関係代名詞節」が後続するときは、この前半部分 (共有される知識) がなくても、後半部分 (話し手の側の指示対象が1つ存在しているという前提) が保証されていれば、初出でも

「the + 名詞 + 関係代名詞節」を用いることができる。共有されるべき知識を関係代名詞節の形で後出しにし、uniqueness を際立たせる目的で、「the + 名詞」を話し手が先取りした構造になっている。⁶ 注5で触れた Leech (1983) の発言の真意もここにあると思われる。

一方、「a/an + 名詞 + 関係代名詞節」では、指示対象の存在は前提とされず、またそれは1つとは限らない、ことが表される。次の2例を比較されたい。

(20) Did you read about *the* man who was robbed today?

(= Exactly one man was robbed today; did you read about that man?)

(21) Did you read about *a* man who was robbed today?

(= I don't specify whether any men were robbed today, or how many; did you read about any man who was robbed today?) [以上、インフォーマント提供]

最後に (13d) の組み合わせであるが、これを「冠詞 + 名詞」を用いて具現化することは理論的に不可能である。なぜなら、「a/an + 名詞」にとって [-mentioned] という特性は動かしがたい不変の語用論的特性であり、一方、「the + 名詞」にとって [+unique] という特性は同じく不変の意味論的特性であるからである。この2つが組み合わせさってどちらかの冠詞で具現されることは、まずない。ここから、

(22) 「the + 名詞」は確固たる意味論的な意味を所有しているのに対して「a/an + 名詞」は語用論によって支えられた意味しかもたない

という結論を引き出すことができる。

5 a/an + 名詞と the + 名詞と無冠詞 + 名詞

5.1 a/an + 名詞と無冠詞 + 名詞

石田 (2002 : 68) と 織田 (2002 : 6) は、「a/an + 名詞」と「無冠詞 + 名詞」の意味上の違いを論じているが、両者の意見をまとめると次のようになる。

(23) ある名詞を境界線によって明確に仕切られた有界的存在として話し手が捉えたとき、言い換えれば、ある名詞を個としての形をもっていると話し手が捉えたときに a/an + 名詞が用いられる。

一方、ある名詞を境界線が明白でない非有界的存在として話し手が認識したとき、言い換えれば、ある名詞を個としての形が解体され、個としての形が失われていると話し手が認識したときに無冠詞 + 名詞が用いられる。

これを一言で言うと、「無冠詞 + 名詞」が「不可算性、一般性、抽象性」を表すのに対して「a/an + 名詞」は「可算性、特定性、具体性」を表すということになる [cf. Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999 : 281)]。

この差異をインフォーマントの情報をもとに具体例を挙げて説明しよう。例えば、Coke とい

う名詞であれば、Have a Coke. とも Have Coke. とも言えるが、前者では目の前にある Coke を飲むというような特定のことが述べられているのに対して、後者では A: I don't like Pepsi. B: Well – have Coke, then. のような一般的な（ここでは習慣的な）ことが述べられている。以下に実例を挙げる。

(24) “Later, I took a break and he showed up at the other end of the mall where I was drinking a Coke.” (J. Grisham, *The Runaway Jury*)

(25) “They live in our neibourhoods, shop in our malls, wear Gap, hey, even drink Coke.”
(A. McNab, *Liberation Day*)

同様に、否定文でも I don't have a Coke. とも I don't have Coke. とも言えるが、前者は何人かの人がカウンターに座っていて A: Has everyone got a drink? B: I haven't got a Coke yet. というような場面での発言と考えられるのに対して、後者は A: What would you like? B: I'd like a Coke. [特定の] C: Sorry. I don't have Coke. Only Pepsi. [一般的 (習慣的)] というような場面での発言と考えられる。

以上から、「a/an + 名詞」(a Coke) は「具体的な個体のイメージ」をもったコーラを表すのに対して、「無冠詞 + 名詞」(Coke) はコーラの「抽象概念」を表すことが明らかとなった。

5.2 無冠詞 + 名詞と the + 名詞

go to school/bed や by bus のように、当該の名詞は可算名詞であるが、慣用的に無冠詞で用いられる一群の名詞がある [cf. Huddleston & Pullum (2002: 409)]。これらの名詞は具体的な特定の建物や物を指し示しておらず、抽象的な概念（その名詞のもつ本来の機能など）を表している。the が付けられると指示性が生まれ、特定の建物や物を指すことになる。

本節では、(in/on) bed と (in/ on) the bed を例に、冠詞の有無による意味の違いを考えてみよう。その際、共起する動詞として lie と sit を取り上げる。

まず、lie の場合、lie in bed とも lie in the bed とも言える。ともにシーツや毛布が主語にくる人を覆っていることが表される。

(26) *In bed, he lay stiffly under the tight sheets and looked towards the window where the moon shone.* (S. Hill, *The Badness within Him*)

*lie on bed は不可で lie on the bed としなければならない。この場合は、シーツや毛布が人を覆っていないという意味になる。

一方、*sit in bed は不可で sit up in bed と言わないといけない。これは、体の下半分をシーツや毛布で覆っている状態をいう。

(27) The steward left the stateroom and Meg *sat up in bed*, the sheet that had been covering her falling to her waist. (H. Robbins, *Goodbye, Janette*)

*sit in the bed は認められず、sit up in the bed と言う必要がある。ここでは、シーツや毛布を掛けていないことが表される。*sit on bed も容認されず、sit on the bed とする。これは床に足を付けてベッドの端に座っている状態をいう。

以上のことから分かるように、人が「シーツや毛布に覆われている」かどうか冠詞選択の基準となる。概略、無冠詞の bed の場合は「シーツや毛布に覆われている」状態を表して、本来の「寝る」という意味になるのに対して、the bed では、単に場所の意味に変化して「シーツや毛布に覆われていない」、つまり、「寝る」以外の目的（シーツや毛布の上に横になったり、いすの代わりに座ったりすること）でベッドが使われていることを表す。

ただ1つの例外は lie in the bed の場合で、the bed となっているにもかかわらず、「寝る」という意味が表されている。インフォーマントによっては、この the を次節で述べる「対立の the」と見なし、lie in the bed は、例えば、not on the floor を含意するという人もいる。

5.3 the + 名詞と無冠詞 + 名詞（「対立の the」を中心に）

次のような慣用表現では初出でも名詞に the を付けて用いる。

- (28) a. He's learning to play *the* piano. (LDCE)
b. I prefer coffee in *the* morning. (OALD)
c. It never rains here in *the* summer. (LAAD)

この the は、全体を構成するいくつかの異なった要素からの特定化を表すことから、他との「対立を表す the」と呼ばれる。この概念については、イギリスでは Close (1962)、Close (1975)、アメリカでは Long (1961)、日本では五島・織田 (1977)、織田 (1982) に詳しく述べられている。

この考え方によれば、(28c) の summer は、数ある夏のなかで特定の夏（例えば、in the summer of 2004）のことを指しているのではなく、1年を構成する「春夏秋冬」のなかで、（春でも秋でも冬でもない）夏という特定の季節を指していることになる [cf. 久野・高見 (2004 : 18-19)]。⁷

次は全体のなかの要素同士が対照されていて、the が対立を示していることをよく表している例である。

- (29) The stations were notorious for being drafty and frigid in *the* winter and completely airless in *the* summer. (S. Brown, *Envy*) [ニューヨークの地下鉄の駅のこと]

the がこのように対立を表すのは、「左右」「朝昼晩」「東西南北」「春夏秋冬」「現在・過去・未来」のようなセットになっている名詞群のうちの1つを取り出して述べるときに多い [cf. Cook et al. (1980 : 87)]。

対立の the はときに省略されることがある [cf. Huddleston & Pullum (2002 : 408)]。

(30) It's very hot here in summer. (OALD)

(31) "I play saxophone in a band called Larry Foster's Rhythm Kings," Sammy said.

(E. McBain, *Lullaby*)

無冠詞で用いられると、季節の例では、暑さ、寒さなどの季節の特徴が表され、楽器の例では、主語がプロの演奏者で、バンドのどのパートを担当しているかが表される [cf. CIDE; Quirk et al. (1985 : 279)].⁸

以上、見てきた対立という考え方は有効であると思われるが、インフォーマントのなかには、この「対立の the」を認めない人もいる。そういう人たちにとっては、the summer/the piano も summer/piano もほぼ同じ意味を表すことになる。

(32) We have breakfast on the balcony in (*the*) summer. (CALD)

(33) I play (*the*) piano terribly. [インフォーマント提供]

5.4 抽象性の度合い

本節の残された問題としては、「a/an + 名詞」と「the + 名詞」と「無冠詞 + 名詞」を比べた場合、抽象度が一番高いのはどれか、ということがある。

この問題を考えるにあたっては、the を「(基本的意味をもつ) 前方照応の the」と「対立の the」に 2 分類しておく必要がある。「前方照応の the」は、[+ mentioned] [+ unique] という意味特徴を表し、また特定の (= 指示的) でもある。したがって、「the + 名詞」のもつ具体性はかなり高い。

(34) I ordered *a* steak and *a* salad for lunch. *The* steak was great, but *the* salad was awful. (Bland (2003 : 265))

それに対して、「対立の the」は、すでに見たように、全体を構成するいくつかの異なった要素からの特定化を表すが、この「the + 名詞」は指示的ではない。このことは、「対立の the」は「前方照応の the」の場合とは異なり、前出の「the + 名詞」を「which + 名詞」で聞き返すことはできないという事実からも証明できる。

(35) A: In *the* winter we can ski. B: Which winter? (不自然な対話)

cf. A: *The* steak was great. B: Which steak? A: The steak I ordered for lunch.

[ともにインフォーマント提供]

これは「which + 名詞」は同種類の集合のなかから 1 つ選び出させる機能をもっているからである。以上から、「対立の the」は「前方照応の the」よりも抽象性が高いと言える。⁹

以下では、議論を「対立の the」に絞った上で、具体例として、play the piano と play a piano と play piano を取り上げ、比較・検討してみよう。

このうち、play a piano というのはなじみが薄いかもしれないが、ときに用いられる。

(36) On the other side of the room, somebody is playing *a* piano. (*Citizen Kane* [映画台本])

インフォーマントによると、ネイティブ・スピーカーは *a* piano と聞くと瞬間的に1つのピアノを思い浮かべ、その場にピアノが存在するという風に解釈するという。これは、かなり具体性をもった解釈と言える。逆に、「毎日ピアノを弾く」とか「ピアノが弾ける」というような習慣性や能力を表す場合は、ピアノの個としての具体的なイメージが薄れるため、*I play a piano every day. とか *I can play a piano. とは言えず、総称 (= 対立) の *the* を用いて、I play the piano every day. や I can play the piano. とする必要がある。さらに、play piano は上で触れたように、プロの演奏者がバンドのどのパートを担当しているかを表すという点で一層ピアノのもつ具体性が希薄になり、抽象度を増した表現になる。ここに、play a piano → play the piano → play piano の順に個物としてのピアノのイメージが薄れ、抽象化していく過程が見て取れる。

以上のことから抽象性の度合いについては以下のような結論を提示することができる。

(37) a/an + 名詞 < (対立の) the + 名詞 < 無冠詞 + 名詞

(37) では「無冠詞 + 名詞」が一番、抽象度が高いことが述べられているが、これは He was professor of English for many years. のような場合の professor は形容詞に近いという事実からも証明できる [cf. McKenzie & Tenma (1965 : 113)]。

しかし、1つ問題が残る。それは、John is *a* scientist. のような連結詞の補語として用いられた「a/an + 名詞」(a scientist) は特定の科学者に言及するものではなく、科学者というクラスがもっている(抽象的な)属性を表すと一般に言われているからである [cf. Burton-Roberts (1976 : 427)]。

確かに、次の例などを見れば、一見、これは正しいように思われる。a lawyer は人ではなく、属性と捉えられていることが (38) から明らかだからである。

(38) John is *a* lawyer, *which* / **who* his father is too. (McCawley (1988 : 419))

しかし、この「a/an + 名詞」は Halliday (1967 : 66-67) のいう intensive *be* と結びついている点に注意すべきである。彼によると、この *be* は “can be characterized as, has the attribute of being” という意味を表すのであるから、属性を表しているのは *be* のほうで、John is a scientist. の「a/an + 名詞」(a scientist) は、「あるクラスの1つのメンバー」[cf. Halliday (1994 : 120)] を表すという点で、まだ具体的な個としてのイメージは残っていると考えられる。¹⁰

上の (38) で、a lawyer を *which* で受けることができるのは、関係代名詞節に *be* 動詞 (= intensive *be*) が存在するからである。*be* 動詞がなければ、次のように *which* は使えない。

(39) *He is a teetotaller, *which* I want to hire. [インフォーマント提供]

(teetotaller = a person who does not drink alcohol)

ちなみに、次の (40) では、前半部で a teetotaller は hire の目的語として人扱いされているが、

後半部に be 動詞 (= intensive be) が存在するため、who ではなくて which が選択されている。¹¹

(40) He wants to hire a teetotaller, *which* I am. [インフォーマント提供]

6 おわりに

本稿では、2 節での冠詞の基本的な意味についての議論を踏まえた上で、3 節と 4 節において、関係代名詞節などの修飾語句が後続すれば

- (41) a. 「the + 名詞」は不定の意味を表すこともある
b. 「a/an + 名詞」は初出であれば [- unique] でなくても使える
c. 「the + 名詞」は [+ unique] を際立たせたいときには初出の場合にも使える

ことを明らかにした。また、5 節では、「a/an + 名詞」と「the + 名詞」と「無冠詞 + 名詞」を比較し、それぞれの抽象性については、「a/an + 名詞 < (対立の) the + 名詞 < 無冠詞 + 名詞」という段階性が認められることを指摘した。

注

- 1 このようなことから C. Lyons (1999:8) は a/an は uniqueness については中立であると考えている。
- 2 (7) は厳密には、①話し手にとっても主語にとっても特定のである場合、②主語にとっては特定のであるが話し手にとっては特定のでない場合、③話し手にとっても主語にとっても特定のでない場合、の 3 通りにあいまいである。ただし、③の解釈が一般的である。
- 3 Donnellan (1971) は、この用法の the を attributive use と呼んでいる。この日本語訳としては、一般に「限定的」が用いられているが、これはミスリーディングである。織田 (1982:180) のように「特性叙述用法」とすべきだろう。
修飾語句を伴わないで「the + 名詞」が不定の意味を表す例としては次のようなものがある。(8)–(10) と同じように、指示的に不透明な文脈で用いられている。
(a) Joan wants to present the prize to *the* winner – so she'll have to wait around till the race finishes. (C. Lyons (1999:167))
- 4 Hawkins (1978:130-38) は関係代名詞節があれば必ず「the + 名詞」が初出でも使えると言っているわけではなく、「関係代名詞節のなかに、しかも先行詞にできるだけ近い位置に先行文脈で話題となっている事柄を置く」必要があると述べている。この場合、それは話し手 (I) や聞き手 (you) 自身でも構わない。聞き手はそれを手がかりに初出の「the + 名詞」を理解するという。しかし、この考え方は、「the + 名詞」は [+ mentioned] でなければならぬという固定観念にとらわれすぎていて賛成できない。
- 5 Leech (1983:91-92) は、初出でも「the + 名詞」が用いられることを認め、(b) の例を挙げている。

(b) Would you like to see *the postcard* I got from Helen last week?

これは「話し手がヘレンから葉書もらった」ことを聞き手は知らないにもかかわらず、話し手は聞き手が分かっているものとして発言し、その上で「葉書は1枚しかない」という意味 (Leech (1983) の言葉では含意) を伝えるという。これは、注4で述べた Hawkins (1978) の見解よりも説得力がある。

次のように小説の手法として、冒頭にいきなり「the + 名詞」が現れることがあるが、これもよく似た現象と思われる。

(c) *The man with the rubber boots stepped into the elevator behind me, but I didn't see him at first.* (J. Grisham, *The Street Lawyer*)

6 Jespersen (1933:161) は「the + 名詞 + 関係代名詞節」の the を不完全限定の冠詞 (the article of incomplete determination) と呼んでいるが、示唆的である。

7 この場合、Close (1962:55) によると、名詞に強勢が置かれる。

8 play the piano のように楽器の前には the が付いて、play golf のようにスポーツの前には the は付かず、無冠詞となるが、この理由を織田 (1982:266) は次のように説明している。卓見である。

(d) 'the so-and-so' によるカテゴリー表現は、+ individual をその特質とする個体名詞が、不定冠詞形 (あるいは不定複数形) に生得の個別具体性を払拭し、普遍概念的なニュアンスを与えようとする工夫であり、個体名詞だけに許されている特権と言えよう。

ここから、play a piano が play the piano となって総称化することや、golf は個体名詞ではないので、*play the golf とは言えないことが無理なく説明できる (注9参照)。

9 the には、このほか、「総称の the」があるが、これは Close (1975:135) や Declerck (1991:323) に従って、「対立の the」と同じものと見なしておく。例えば、*The maple is a beautiful tree.* であれば、maple は oaks や pines などと対立していると考えられる [cf. Mckenzie & Tenma (1965:106)]。

10 Burton-Roberts (1976:444) は「He is a doctor. の『a/an + 名詞』は総称の『a/an + 名詞』と同一のものである」と主張している。そうすると、「対立の the」は「総称の the」と同じものであるから、(37) の正しさを立証するには、「総称の a/an」と「総称の the」を比べ、前者のほうが抽象度が低い (具体性が高い) ということ言えばよいことになる。

これについては、Frank (1993:127) の「総称の a/an」は「そのクラスの個々の見本を強調する」のに対して「総称の the」は「そのクラスの具体的な見本ではなくクラスそのものを強調する」という意見が参考になる。つまり、「総称の a/an」には、「総称の the」にはない具体的な個のイメージが伴うのである。したがって、次のような変化を表す文脈では、それがクラス全体に適用される以上、「総称の a/an」は使えないことになる。

(e) *A computer is changing the business world.

cf. *The computer is changing the business world.* (ともに Master (1996:218))

11 Burton-Roberts (1976 : 428) は、「John is a scientist. は*A scientist is John. のように主語と主格補語を入れ替えることができないが、これは a scientist が属性を表すためである」としているが、むしろ、これは be が属性を表すことの証拠になるのではないだろうか。

また、John is a teacher. だけでなく、They are teachers. のように、主格補語が「a/an + 名詞」でなくても「先生」の属性を表すことができるが、これも属性を表すのは、「a/an + 名詞」ではなくて be であることを立証するものである。

参考文献 (1 節で挙げたものは除く)

- Bland, S. K. 2003 *Grammar Sense 3*. OUP
- Burton-Roberts, N. 1976 "On the generic indefinite article." *Lg.* 52, pp.427-48
- Celce-Murcia, M. & D. Larsen-Freeman 1999 *The Grammar Book*. (2nd ed.) Newbury House
- Close, R. A. 1962 *English as a Foreign Language*. George Allen & Unwin LTD
_____ 1975 *A Reference Grammar for Students of English*. Longman
- Cook, J.L. et al. 1980 *New Way to Proficiency in English*. (2nd ed.) Blackwell.
- Declerck, R. 1991 *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha
- Donnellan, K. S. 1971 "Reference and definite description" In Steinberg, D.D. and L. A. Jakobovits (eds.) *Semantics* pp.100-114. CUP
- Eastwood, J. 1994 *Oxford Guide to English Grammar*. OUP
- Frank, M. 1993 *Modern English* (2nd ed.) Regents Prentice Hall.
- Givón, T. 1973 "Opacity and reference in language: an inquiry into the role of modalities."
In Kimball, J. P. (ed.) *Syntax and Semantics 2* pp.95-122. Taishukan
- Gotoh, T. (五島忠久) and M. Oda (織田稔) 1977 『英語科教育 基礎と臨床』研究社出版
- Halliday, M.A.K. 1967 "Notes on transitivity and theme in English Part I" *Journal of Linguistics* 3 pp.37-81
_____ 1994 *An Introduction to Functional Grammar* (2nd ed.) Edward Arnold.
- Huddleston, R. & G. K. Pullum 2002 *The Cambridge Grammar of the English Language*. CUP
- Jespersen, O. 1933 *Essentials of English Grammar*. George Allen & Unwin
- Leech, G. 1981 *Semantics* (2nd ed.) Penguin
_____ . 1983 *Principles of Pragmatics*. Longman
- Long, R. B. 1961 *The Sentence and its Parts*. The University of Chicago Press
- Master, P. 1996 *Systems in the English Grammar*. Prentice Hall Regents
- McCawley, J. 1988 *The Syntactic Phenomena of English*. Volume 2. The University of Chicago Press.
- McKenzie, W.E. & M. Tenma (天満美智子) 1965 *English Expression: Oral and Written*. Kenkyusha
- マケーレブ、ジャン 1998 『ネイティブ感覚の英文法』朝日出版社

Oda, M. (織田稔) 1982 『存在の様態と確認—英語冠詞の研究—』 風間書房
Quirk, R. et al. 1985 *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman

補注

[5.3 節] 次のようなものも「対立の the」と考えられる。

(f) “This is a game of cat and mice, and we’re *the* mice.”

(S. Sheldon, *Are You Afraid of the Dark?*)

(g) Tanner patted his brother on *the* shoulder. (*ibid.*)

[5.4 節] 以下は (38) に類する実例である。

(h) “Harry’s a small-time grifter from the word go.” “Exactly.”

“*Which* you’re not,” said Costello. (H. Robbins, *The Secret*)

(grifter = someone who dishonestly obtains something, especially money.)